

<Interview> Challenging Media Literacy
Education (3) : An Interview with Cyndy Scheibe

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 郷子, SAKAMOTO, Jun メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/314

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



インタビュー

メディア・リテラシー教育の挑戦（その3）

— プロジェクト・ルック・シャープ代表シンディ・シャイベ氏に聞く —

Challenging Media Literacy Education (3)

An Interview with Cyndy Scheibe

インタビュー・翻訳者 村上郷子

インタビュー 坂本 旬

MURAKAMI, Kyoko · SAKAMOTO, Jun

はじめに

2009年7月29日から8月5日の間、全国メディア・リテラシー教育協会（NAMLE：The National Association for Media Literacy Education）の大会が開催された。この大会で、全国メディア・リテラシー教育協会（NAMLE）とともにメディア・リテラシー教育に尽力してこられたシンディ・シャイベ（Cyndy Scheibe）氏にお会いし、インタビューを行うことができた。シャイベ氏は、プロジェクト・ルック・シャープ（Project Look Sharp）の創設者であり、代表理事でもある。また、ニューヨーク州のイサカ大学発達心理学部の准教授であり、「テレビ・ラボとアーカイブの影響に関する研究センター（The Center for Research on the Effects of Television Lab and Archive）」の所長でもある。現在、メディア・リテラシー教育に関する執筆、講演、ワークショップなど精力的に活動しておられる。お忙しい中、インタビューのためにお時間をとっていただいたことに感謝申し上げます。

村上 本日は、お忙しいところ時間をつくって下さりありがとうございます。さっそくですが、先生は、ピアジェやレフ・ヴィゴツキーなどの発達心理学がご専門と伺いました。それでは、ヴィゴツキーやピアジェの発達心理学がどのようにメディア・リテラシーの領域に応用できるのか、またその問題点など、先生のお考えをお伺いしたいと思います。

シャイベ いい質問ですね。それはまさに、私が本の1章に書いたことです。それはメディア・リテラシーに特化したものではありませんが、メディアやメディアを触発する子どもたちについてのもので

す。その章は、ベーター・ラング社の『若者とメディアに関する20の質問』という本にあります。

ところで、パワー・レンジャーズというのをご存知でしょうか。パワー・レンジャーズは、子どもたちのテレビ番組で、善人と悪人がいて、コスチュームを着た悪人を打ち負かすんですよ。

坂本 パワー・レンジャーズは日本からきたものですよ。

シャイベ そうです。それは番組では忍者ものの類ですが、登場人物は日本人ではありません。でも、

キーワード：メディア・リテラシー教育、メディア教育、NAMLE、プロジェクト・ルック・シャープ
Key words : media literacy education, media education, NAMLE, project look sharp

彼らがマスクと衣装を身に付けている時は、日本人の俳優によって演じられています。この番組はとても人気があって、15年もの間ここで放映されていますが、同時にとても暴力的です。ですから、私は「ピアジェとパワー・レンジャーズ：発達心理学は子どもやメディアについて何が言えるのか」という小論を書いたのです。しかし、そのほとんどはメディアを誘導する子どもたちについて書いたのです。つまり、子どもたちはメディアや子どもたちへのメディアの影響について理解しているのか、そして、発達理論は子どもとメディアについてどう関連づけができるのか、といったような内容です。私が言いたいことの1つとして、ピアジェは、テレビについては全く気にもかけないだろうということです。彼は、子どもの物理的な世界の容量と大きさ、そして子どもの夢などのようなものから子どもを理解することには大変興味を持っていました。ですから、彼は、今日の私たちがメディアに興味を持つ方法とは違った形で、メディアに興味を持つかもしれませんね。

村上 そうですね。つぎにパワー・レンジャーズの暴力性に関連して、メディア・リテラシーと戦争についても伺いたいと思います。私たちが、プロジェクト・ルック・シャープに関心を抱いたのは2003年のNAMELの大会で、プロジェクト・ルック・シャープのクリス（Chris Sperry）さんだけがテロや戦争の問題に触れていたからです。アメリカは、過去も今でも様々な戦争に関わってきたのですが、当時は誰も戦争について語る人はいませんでした。アメリカでは、自国が関わっている戦争について、他国のニュース、例えば日本のテレビなどを放送するのでしょうか。

シャイベ ええ、実際にはあるかもしれません。アメリカには、それは多くのテレビ放送のチャンネルがあります。しかし、そのほとんどは全てアメリカで制作された番組であり、アメリカ以外で制作されたものはほとんどありません。通常、どの地域かにもよりますが、1～2局は近いですからカナダから来ているかもしれません。おそらく、もう1～2局がイギリス、BBCから来ているのかもしれません

が、世界中のいたるところから来ているというわけではありません。そして、他国からの番組を見るために、しばしば割増料金を支払うこともあります。私のお隣はギリシアから来ていますが、彼らはギリシアからの特定の番組を見るために割増料金を支払っています。しかし、大多数のアメリカ人はそんなことはしていません。アメリカ人の見ている番組のほとんどがアメリカで制作されたものですから。

私がペルーにいたとき、娘がペルーで生まれました。彼女が赤ん坊だったときに、私は彼女を養子にしました。私たちは、4年前にペルー訪問のためにホテルにいましたけど、ホテルのテレビには、世界中から50ものチャンネルがありました。中には日本からの番組もひとつかふたつありましたね。中東、ヨーロッパ、南米中からの番組と、アメリカからのものがいくつかありました。私は驚きましたよ。ただただ素晴らしかったのです。それで、私は友人に言ったのです。とても驚いたってね。そうしたら、「あなたはアメリカから来たのだから、そうした番組を見なければなりませんよ」と彼は言ったのです。

村上 そうなのですね。

シャイベ もちろんアメリカには350もの番組がありますが、すべてがアメリカで制作されたものです。彼は言いました。世界で何が起きているかをどうやって知るかですね。その問いへの答えは、我々にはありません。私たちが、アメリカで得られるニュースは、アメリカのニュースメディアを通して説明されます。それは危機的な状況ですし、問題のひとつでもあります。ですから、私やソックスさん（Sox Sperry）、クリスさん（Chris Sperry）など多くの人たちがニュースをオンラインで見られるのです。私たちはテレビからニュース得ることはあまりないですね。他のところからニュースとして扱われるプログラムや番組、そしてラジオからもニュースを知ることができます。ですが、私たちはオンラインで直接他のところからのニュースにアクセスします。しかし、アメリカでは多くのバイアスにまみれています。そうしたバイアスには、ほとんどの人たちが気づかなかったり、もしくは気づいたとしても、気

にかけることはないでしょう。そうした人たちの多くは、なぜ他国からニュースを仕入れる必要があるのか、って言うでしょう。メディア・リテラシーは、こうした問いへ答えるためにもとても重要なのです。

村上 そのために9月11日発端の戦争問題を、プロジェクト・ルック・シャープの教材として採用したのでしょか。

シャイベ 9・11には全く関連ありませんが、私たちは、アフガニスタン戦争などの戦争テーマ全般に関するメディア構造を扱うことに決めました。その質問に答えるために、少し戻ってプロジェクト・ルック・シャープの歴史について少しお話ししましょう。戦争に関する質問の答えと深く関わっていますから。

私は、イサカ大学発達心理学の学科に在籍しています。これまで子どもとテレビに関する研究をしました。そして、私たちはテレビのコンテンツについての大きなアーカイブを集めており、どのように子どもたちがテレビを理解するのかを研究していました。こうした研究をしているうちに、子どもたちがテレビを見ていると、なぜ真実ではないことでも信じるようになるのかについて、興味を持つようになりました。

次に、子どもたちがより正確にテレビを理解するようになるためにはどのように手助けできるかを考えました。私たちは、保護者たちに、子どもたちへのテレビの影響について話さなければなりません。そのため、メディア・リテラシーという学問に行きついたのです。保護者の方々は、テレビの影響力について、自分たちが子どもたちに何かできるかを知りたがっていました。アメリカでは、それについて私たちができることは限られており、いずれもたいした効果はありません。

私たちは、テレビのコンテンツを規制するように政府に要請することができます。しかし、政府の規制は、本当に突拍子もない、何の用も成さないしろものです。そこには常に法の抜け穴があるのです。政府は実業界の意向に強く影響されるため、実業界の機嫌を損ねることをしたくないからでしょう。ですから、子ども用のテレビにどのくらいの広告を

載せたらいいかというルールづくりには、当然その限度を設けるのですが、その規制では、限度自体を上げるのです。政府は、実業界の不満をそらすために、業界側が子どもたちにより多くの広告をすることができるようにするのです。ですから、私はどんなに健全な方法でもメディアを規制する政府について楽観的にはなれませんね。つまり、政府がつくる規制は、実施されない場合もしばしばですし、実施されたとしても、規制は骨抜きになっているのです。ですから、規制は、私たちの目指す方向性ではありません。アメリカには、言論の自由を保障する憲法修正第一条があります。ですから、規制できることは限られているのです。

2番目の選択肢は苦情です。メディアを制作する人たちに不満をぶつけることによって、メディアが変わるようにしむけるのです。私はそのやり方を全面的に支持しています。良い考えだと思いますよ。しかし、業界側がお金を稼いでいるならば、私たちがどんなに不平不満をぶつけようとしても、変わらないだろうと思います。業界側が変わるとすれば、お金を稼ぐためです。ですから、この選択肢もメディアを変える解決策にはなっていません。

3番目の選択肢は、保護者が子どもたちの見ているメディアを管理することです。それはそれでいいのですが、この選択肢では、賢明な判断をするにはどうしたらよいかを子どもたちに教えられないため、保護者の負担が大きく、保護者の方が疲れてしまいますね。業界側ではテレビの影響力を最大にするのに懸命で、そのつけをすべて保護者に押し付けているのです。そして、業界側の多くは自分たちのせいではないと言うのです。保護者の方でテレビを子どもたちに見せたくないならば、見せなければいいんです。このようなやり方は、私からすれば、責任回避の類です。業界では、保護者へすべての責任をかぶせているんです。コカインを売ったり、それをただであげたりするようなもので、もしコカインを持ちたくないならば、それを使ってはいけなと言っているようなものです。これが実質的な解決策とは考えられません。保護者がどのようなメディアを自分たちの子どもが使っているのかを知ることや、様々な理由のためにぎりぎりの時間まで親の価値観を子どもたちに伝えることは大切なことだと思いま

す。しかし、ひとたび子どもたちが家の外に出れば、それは用を成さないのです。

それで、4番目の解決策は、子どもたちに批判的に考え、自分たちが見ていることについて批判的な思考をするように教えるということです。このようにして、私はメディア・リテラシーにたどり着いたのです。保護者にも話しますよ。何をしたらよいかを知りたがっていますからね。保護者の方々に、自分の子どもたちが何を見ているのか、よく観察するように言います。保護者の方に対し、問いを設定し、事実を見だし、それについて子どもたちに話すようにと教えます。それがメディア・リテラシーと呼ばれるものとは知りませんでした。

当時、おそらく1994年から1995年ごろにさかのぼりますが、テレビ・リテラシーについて書かれた何らかの研究がありました。保護者は子どもたちとテレビを見ており、テレビで見たことを子どもたちに話すのです。当時は、テレビが本当にほとんど唯一の問題と考えられていたからです。他の何もかもがよかったのですが、テレビは問題でした。ですから、テレビ・リテラシーと呼ばれていたのです。私はこうした研究には詳しくはなかったのですが、メディアに関してあまり知りませんでしたし、メディア・リテラシーについてもよく知りませんでした。

ところで、フェイス・ロゴウ (Faith Rogow) をご存知ですか。彼女のテレビに関する分析は、非常に優れたものがあります。彼女は、テレビの分析方法についてよく分かっており、これまでよく聞かれる視点とは切り口が異なっていました。その彼女が、私にもっとメディア・リテラシー知るべきだと言ったのです。ご存知かとは思いますが、私たちよりずっとずっと長くメディア・リテラシーを実践してきたカナダ、オーストラリア、イギリスのようなところに比べると、アメリカのメディア・リテラシーは遅れています。メディア・リテラシーは、ほとんど語学の科目や国語（英語）の文脈でなされますが、映画でも実践されています。特に、イギリスのメディア・リテラシーに関する多くの初期の作品は、イギリス映画協会から来ていました。これらの素晴らしい質問集、映画に関する概念、そして映画分析のしかたを開発したのも彼らなのです。

しかし、アメリカでは、テレビや映画は、保護者にとっても、子どもにとっても悪いものだという考え方が、いまだに色濃く存在しています。つまり、本は良いが、テレビや映画悪いということです。したがって、楽しいだけで、それから何も学ぶことはないという理由で、教室の中ではテレビや映画を見ないということがあるのかもしれませんが。テレビや映画には多くの偏見がありますので、有害なメディアから子どもたちを保護することを念頭に、これまでのメディア・リテラシーやテレビ・リテラシーは実践されてきているのです。子どもたちは傷つきやすいので、子どもたちを保護しなければならない、とね。メディアは悪というような見方をする人がいまだに多くいると思います。つまり、保護者、教師そして政府は、悪のメディアから子どもたちを保護する必要があるということです。これはアメリカでは大問題ですが、オーストラリア、イギリスおよびカナダでは、見たところ、ほとんどの場合問題にはされません。ですから、長い間、オーストラリア、イギリス、カナダのようにメディア・リテラシーを実践しているところもあれば、アメリカのように保護主義的なメディア・リテラシーに走るところもあるというわけです。

村上 そうなのですね。

シャイベ とりわけ、オーストラリアやイギリスの人たちにとって、子どもたちを守ることに余念がないアメリカ人は、間違っているし、だめだということなのですね。ですから、私たちは、他のモデルを取り入れるのが遅かったのです。

それで、1992年、コロラド州にあるアスペン協会と呼ばれるところだと思いますが、そこが、さまざまな領域のリーダーを一堂に集めたシンクタンクの類のための基金をいくつか提供したのです。メディアや教育分野では、メディア・リテラシー教育の実践やメディア・リテラシーを定義する計画が提案されました。私たちのメディア・リテラシーの定義は、さまざまな形態のコミュニケーションにおいて、アクセスし、分析し、評価し、制作する4つの能力を指します。今までに多くの人たちが、このメディア・

リテラシーの定義を使ってきました。自分ではこのメディア・リテラシーの定義が一度も役に立つと思っただけではありません。そして、私たちがそういうことを言ったことはありません。どういう意味がお分かりですか。

1992年、ノースカロライナ州のアパラチアン州立大学である会議が行われました。その、デヴィッド・コンシダイン先生は、メディア・リテラシーの重鎮のひとりであり、アパラチアン州立大学の教授です。彼らはそこで会議を開きました。それが、メディア・リテラシーの類の最初の会議でした。そこに彼らは人を集めて、ワークショップを行い、そして、自分達がメディア・リテラシーで何をやっているのかを共有しました。1996年から1997年か、正確な年を覚えていませんが、ロサンゼルスで全国メディア教育会議（The national media education conference）が開催されたのと同じ年のことです。その会議は、私が行った最初の会議です。その会議は、メディア教育のパートナーシップ（Partnership for Media Education（PME））と呼ばれる団体の後援によって、ロサンゼルスで開催されました。それは何人かの人たちとある組織が集まっただけのものでした。

これらの組織は、まだNAMLEのような組織ではありませんでした。それは異なる組織間のパートナーシップであり、4人の主要メンバーのうちの2人がレネイ・ホブス（Renee Hohbs）とリズ・トーマン（Elizabeth Thoman）でした。その他の2人（ナンシー・チェイス・ガルシアとリサ・ライズバーグ）は、そのパートナーシップ（PME）の人たちです。2000年、PMEはアメリカ・メディア・リテラシー同盟（Alliance for a Media Literate America（AMLA））と名称を変え、その翌年、全国メディア教育会議を開催しました。AMLAの名前は、セントルイスで開催された会議（2007年）まで使われていました。

私は、コロラド州のデンバーとロサンゼルスにも行きました。それ以来、私はすべての会議に行っています。コロラド（1998年）とミネソタ州のセント・ポールの会議（1999年）では、メディア教育のパートナーシップによる後援を受けていました。当時は、本当にちょうどよく、こじんまりした人数で行われていました。ミネソタの時には、8人の委員

会メンバーがいたと思います。その時、私はミネソタで役員になるよう頼まれたのですが、多くの問題もありました。

村上 どういった問題があったのですか。

シャイベ 多くの問題です。まず、財政上の問題がありました。少人数しかいませんから、どのように会を運営するのか、会議を開催するためにどうやって資金を調達するのか、といったことです。それから、メンバーがだれからお金を取ったか、といったことに関する苦情などです。ですから、ミネソタで私たちは、会の運営方針を変更して、会員組織をつくることについて話しあいました。つまり、団体組織をつくることです。私たちは、いろいろな人たちに組織に参加してくれるように呼びかけました。つまり、会議の後援者たちには、一グループの人たちの代わりに組織を応援してくれるようお願いしたのです。こうしたことが、AMLA、つまりアメリカ・メディア・リテラシー同盟を形づくる背景となった考えなのです。

それで、私たちは会議をはじめ、組織でメディア・リテラシーを実践するアメリカ中の人たちの大きな傘になるような名前をひねり出すために、多くの時間とアイデアを出し合い、多くの時間と議論の末にこの名前を思いつきました。それは一種の高潔な目標でしたが、多くの人たちが多様なメディア・リテラシーを実践していたので、決して一枚岩に機能することはありませんでした。それらの目標は、メディアを変えることでもあり、もしくは子どもを保護するか、またはテレビを全く見ないことであるか、もしくは、何が良い映画で、何が悪い映画かについての映画評論などさまざまです。それらの目標はすべて問題ありません。それらはまさしく私たちの観点からきたもので、教育で扱われるものではありません。私たちは少しずつこのAMLAの組織をつくっていったのです。ですから、私たちはアメリカ・メディア・リテラシー同盟と呼ぶのです。中には、アメリカ・メディア・リテラシーに反対する人もいるかもしれませんが、私たちは、そうした人たちを全て同盟の中にいっしょに集めようとしたからです。多

くの問題が初期の頃からありました。当組織がタイム・ワナーやチャンネル・ワンといったようなところからお金をとっていることについて、未だに怒っている人たちが多くいたのです。そして、本気でメディアと戦い、議会に働きかけをして欲しいと願っている人々もいたのです。新しく入った人たちの中には、私たちはこのグループに属しているけど、これは私たちがやるべきことではない、と主張する人もいました。ですから、毎日が戦いにあけくれていました。そして、何が起こったかという、メディア教育のための連合活動（ACME）と呼ばれる別の組織みたいなものが立ち上げられたのです。その団体は、まだ周辺で活動していると思いますよ。その団体の実際の目標は、メディア構造を変えることであり、それ自体は良いことです。何らかのレベルでは、こうした組織のおかげで、私たちのやるべきことが明確になると思います。なぜなら、この組織がロビー活動してくれているおかげで、私たちがそれをする必要がないのですから。多くの人たちが両方の組織に属しています。いいことです。みんな、それをするべきです。ただ、私たちはしませんし、しようとも思いません。

主に学際的な人たちの間で、この名前には問題がありました。例えば、私が履歴書にこの組織の名前を書くと、私の同僚たちは、学術的な組織として真面目に受けとらないで、活動家がいるようなちょっとおかしな組織があるかのように言うんですね。ですから、1年か2年前、つまり前回の会議の直後にたくさんの人たちを集めて、新しい名前の妙案がないかを聞いてみたわけです。教育組織というわけで、私たちは「全国協会」という名前を選んだのです。それで、全国メディア・リテラシー教育協会と他の下部組織はそのメディア・リテラシーです。

私たちはメディア・リテラシーがスキルだと考えています。メディア・リテラシーは、読み書き能力のようなものですね。メディア・リテラシー教育とは何を、どのようにそのスキルを教えるのか、そうしたことが私たちの焦点になったのですが、これらは、私たちの見解ではメディア教育ではありません。メディア教育ではメディアについて教えることが多く、多くの人たちがその用語を使っていますが、メ

ディア教育はメディア・リテラシーでも、メディア制作を教えることでもないのです。もちろん、メディア教育がメディア・リテラシーの重要な目標であり、重要な部分であると思います。しかし、単にメディアを制作したり映画や広告をつくるのがメディア・リテラシーをしていることを意味するわけではありません。メディア・リテラシーでは、メディアを制作しなければなりませんし、そのメディアのオーディエンスは誰か、誰がこのメディアから利益を得ているのか、そしてそのメディアのイメージから誰が害を被る可能性があるのかを考えなければなりません。私たちの考えでは、制作は必要だけれども、反省があって初めてメディア・リテラシーといえるのです。ですから、私たちはメディア・リテラシー教育が私たちのなすべきことだと決めたのです。

私は、メディア・リテラシー教育は良い選択だと思いますし、私たちは、それをNAMLEと呼び、みんなもNAMLIとかNAMLAと発音していました。その呼び方が、単語の名、つまり「私の名前は」に似ていますね。それで、NAMLEなのです。このようにして私たちはいつも組織の名前を考えるのです。それがNAMLEの組織とAMLAの歴史で、この二つは本質的にはまったく同じ組織で、単に異なる名前だというわけです。AMLAは2001年、テキサス州のオースティンで設立され、私はその創設メンバーのひとりでした。その年に私は会議を開催し、2003年にはボルチモア、2005年にはサンフランシスコで、2007年と2009年はセントルイスで会議を開き、2011年はフィラデルフィアで開催されます。これがNAMLEの組織のちょっとした歴史というところでしょうか。

さて、プロジェクト・ルック・シャープの話に戻しましょう。それで、ロサンゼルスから戻った後、私は興奮して、メディア・リテラシー教育はすばらしい、私たちはこれをやるべきだと言ったのです。それで、私の知っている人たち、つまりクリス・スベリーのよう授業でメディアについて教えている人たちを集めました。クリスさんは、私の娘たちの友人ですし、同じクラスでしたから知っていました。大学レベルのコミュニケーション学部でメディア制

インタビュー

作を教えている人もいれば、教育学部で教師教育を教えている人もいました。集まった皆さんと昼食をとって、みんなにこの会議のことやメディア・リテラシーとはどんなものかを話しました。それはすごい。私たちはメディア・リテラシーをやるべきだ、ということで、私たちは話し合いを始め、何をすべきかを決めるのに約1年をついやしました。教育の基準にメディア・リテラシーを入れるため、政府に圧力をかけるロビー活動を私たちにさせたいと思う人もいました。個人的にはそれは良い目標だと思いますよ。しかし、私たちはニューヨーク州にいます。ニューヨーク州は全くの機能不全です。ニューヨーク州では政府に多くの問題があるので、私たちはロビー活動をしようとは思いませんでした。私たちがやろうと決めたことは、授業でどのようにメディア・リテラシーを活用するかを先生方に教えることです。つまり、教職員研修をすることですね。そうすれば、子どもたちに教えるために私たちが教室にいかなくてもいいわけです。直に子どもたちに教えるとなると、毎年行かなければならないですからね。

でも、先生方を教えることができれば、先生方が毎年子どもたちを教えることができるということです。そのため、教職員研修が私たちの目標になりました。

初めの頃、私たちがやることは、他の人たちが作ったあらゆる種類のメディア・リテラシーのいいサンプルを手に入れて、それらのいくつかを買ったり、他の組織やメディア・リテラシーの一般的なことについて話をしたりすることだと考えました。それで、私たちはワークショップを始めたのですが、多くの人たちが非常に関心をよせてくれました。私たちの学区と4つの学区では、私たちと一緒に、メディア・リテラシーの方法を理解しようとしてきました。これが私たちの最初の5年間にしたことです。私たちは所属するイサカ大学から少しの助成金をもらいました。

村上 それは、プロジェクト・ルック・シャープ設立のためですか。

シャイベ プロジェクト・ルック・シャープの設

立には余りにもささやかなものでしたし、私たちもやや停滞気味でした。で、1996年から1997年頃、私たちは、だれからの許可もお金もなかったのですが、プロジェクト・ルック・シャープを立ち上げたのです。初めは、手ごたえがありましたし、何かを始めるにはとっと早いやり方でした。そして、私たちは、ワークショップを教えるために学区から少のお金をもらいましたが、私はこうした仕事を教育の一環として無償でやっていました。それで、私たちは「プロジェクト・ルック・シャープ」の名前にいきついたのです。その名前が問題になる時期がありました。その名前を決して覚えていただけませんでしたから、みなさんはいつも私たちを「プロジェクト・ルック・スマート」とよぶことが多かったですね。「プロジェクト・ルック・シャープ」が何をやっているのか見当もつかなかったのでしょうか。しかし、今では、私たちも「プロジェクト・ルック・シャープ」として名前も評判分もよく知られるようになりましたので、名前を変える必要もなくなりました。それで私たちは、教師教育センターがあるイサカ大学と連携するようになったのです。

村上 なるほど、これまでのシャイベ先生のお話から、NAMLEやプロジェクト・ルック・シャープの歴史がよくわかりました。ありがとうございます。

本インタビューは平成21年度文部科学研究費補助金（課題番号 19300286）の研究成果の一部である。

注

1) Partnership for Media Education (PME)。全国メディア・リテラシー教育協会 (NAMLE) 設立時の名称。